

Title	手伝うことの依頼に対する断りの日タイ対照研究—親疎関係・上下関係・依頼の負担度による意味公式の選択に関する分析—
Author(s)	Poonvongprasert, Thanit
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73542
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名 (POONVONGPRASERT THANIT)

論文題名

手伝うことの依頼に対する断りの日タイ対照研究
—親疎関係・上下関係・依頼の負担度による意味公式の選択に関する分析—

論文内容の要旨

本研究は、日本語教育に応用するための基礎研究として「手伝うことの依頼」に対する断りに焦点を当てたものである。具体的には、上下関係、親疎関係、依頼の負担度の3つの要因によって、日本語母語話者とタイ語母語話者が用いる意味公式の使用の共通点と相違点を明らかにすることを目的とした。

断りに関する先行研究では「提案」「勧誘」「物の貸し借りの依頼」に着目した対照研究は数多く見られるが、「手伝ってほしい」という依頼に対する断りを扱った日タイ対照研究はまだなされていない。また、量的分析・質的分析手法をとった研究は管見の限り少数に留まっている。そこで、本研究では「手伝うことの依頼」に対する断りを取り上げた。

研究方法としては、談話完成テスト(DCT)およびフォローアップインタビューを採用した。調査協力者は、日本語母語話者(JJ)とタイ語母語話者(TT)の大学生、各100名である。DCTでは、上下関係、親疎関係、依頼の負担度の3つの要因に基づき、以下の8つの場面を設定した。具体的には、場面1・2(親/疎・目上・重)がオープンキャンパスの準備の依頼、場面3・4(親/疎・目上・軽)本の返却の依頼、場面5・6(親/疎・同等・重)が翻訳の手伝いの依頼、場面7・8(親/疎・同等・軽)が宿題のチェックの依頼である。意味公式を使用し断り文を分析し、それぞれの意味公式の出現率を計算することによってその出現傾向を観察した。さらに、場面ごとにJJとTTが用いる意味公式の出現率の有意差、およびそれぞれの要因による出現率の有意差について、カイ二乗検定を行った。有意差が見られた場合は、どの意味公式の出現率に有意差が見られるかを検証するために、残差分析を行った。

本研究のデータで使われていた意味公式は、{結論}{行動指示}{詫び}{理由}{積極的代案提示}{消極的代案提示}{条件提示}{約束}{否定的反応}{理解}{驚き}{情報確認}{共感}{冗談}{励まし}{非難}の16種類に分類される。分析の対象としたのは意味公式の出現率、意味公式の出現順序のパターン、冒頭の意味公式、最後の意味公式である。さらに、それぞれの意味公式の言語形式とその内容に関する分析、および文化差の観点から考察を行った。その後、日本語教育における教育法に関する提案を行った。結果は以下の通りである。

1.意味公式の出現率

共通点を2点にまとめる。

- (1)全体的な傾向を見ると、目上に対する場合より同等に対する方が意味公式の種類は多く見られた。JJとTTは双方ともに目上と同等で使われる意味公式が異なっている。すなわち、いずれも上下関係が意味公式の使用に影響を与えていると言える。
- (2)全体的な傾向を見ると、JJとTTともに、依頼の負担度による意味公式の出現率の有意差があまり見られなかった。

相違点は以下10点である。

- (1)JJは、親疎関係による意味公式の出現率の有意差があまり見られなかった。一方で、TTは親疎関係による有意差が多く見られることが分かった。
- (2)すべての場面において50%以上のJJが{結論}を使用しているのに対して、TTはJJよりも{結論}の使用がかなり少ない。
- (3)すべての場面において、70%以上のJJは{詫び}を使用しているのに対して、カイ二乗検定を行った結果によれば、TTについては親疎関係によって{詫び}の出現率が左右されることが分かった。具体的には、親しくない人に対する方が親しい人に対してより{詫び}を多く使用している傾向がある。

(4)JJとTTには{理由}を多く使用するという共通点があるが、その述べ方に大きな違いがある。JJは[理由の内容]のみを述べる強い傾向が見られる。一方、TTは [理由の内容]と[理由の内容+付加説明]の出現数が同程度見られ、上下関係や親疎関係によって出現率が左右される。具体的には、親しい目上なら [理由の内容+付加説明]を、親しくない目上なら [理由の内容]のみを述べる傾向が見られる。また、同等からの依頼の場面では、[理由の内容]と[理由の内容+付加説明]の出現数が同程度である。

(5)内容の観点からみると、JJは自分に関係がある理由のみを述べるのに対して、TTは自分以外にも自分と家族に関係がある理由を述べる。また、JJは明確な理由と、不明確な理由の出現率が同程度である。しかし、TTにおいては明確な理由の出現率の方が著しく高い。[理由+付加説明]の場合、JJについては「時間的に都合が悪いという説明」の出現率が突出しているのに対して、「理由の大切さを強調するという説明」や、「心理的に負担であるという説明」はほとんど述べられない。一方、TTは「理由の大切さを強調するという説明」、および「心理的に負担であるという説明」が多く述べられる傾向にある。

(6)JJはほとんど{条件提示}を使用しないのに対して、TTは親しい相手に{条件提示}を多く使用している。内容の観点からみると、TTの{条件提示}の内容には多様性があると言える。また、親疎関係、上下関係、依頼の負担度の3つの要因によって{条件提示}の内容と出現率が変わることが明らかになった。

(7){否定的反応}について、JJとTTで大きく異なる点は、間投詞以外、TTは呼びかけで否定的反応を表すことである。親しい相手には{否定的反応}を多く使用している。しかし、親しくない相手には{否定的反応}をあまり使用せず、代わりに{詫び}を多く使用する。結果から、親疎関係によってTTの{否定的反応}の出現率が左右される傾向が見られた。

(8){冗談}はTTにしか見られない意味公式である。親しい同等に対して使われる傾向がある。具体的には、「手当の要求」に関する冗談が最も出現率が高い。

(9){励まし}はJJにしか見られない意味公式である。親疎関係にかかわらず使われる。

(10){非難}に関するJJとTTの相違点は、その対象が異なることである。具体的に言うと、JJは頼む量に焦点を当てて非難する傾向が強い。分量自体のみならず、他人に重い負担をかけること自体を非難する場合もある。一方、TTは頼む時間の適切性を非難する傾向が強い。

2.意味公式の出現順序のパターン

意味公式の出現順序に関する共通点を以下の2点にまとめる。

(1)全体的な傾向を見ると、JJとTTはともに、{理由}が中間にあるパターンを最も多く使用している。

(2)JJとTTはともに、目上より同等に対する方が意味公式の出現順序のパターンの数が多く、意味公式の組み合わせも複雑である。つまり、目上の依頼を断る際は限られた意味公式とパターンを使うのに対して、同等の依頼を断る際は相手の親疎関係に応じて意味公式とパターンを様々に使い分けられることが明らかになった。

一方、相違点は以下の4点である。

(1)JJは、すべての場面において{理由}が中間にあるパターンの出現率が6~9割である。一方、TTの中で{理由}が中間にあるパターンを使うのは5割程度にとどまっている。残りの半分のTTは、{理由}が冒頭の意味公式であるパターンか、{理由}が最後の意味公式であるパターンを使う。JJとTTともに{理由}が中間にあるパターンを最も多く使用しているといっても、JJとTTの出現率に大きな差がある。

(2)JJはすべての場面において、パターン{詫び}+{理由}+{結論}の出現率が高い。一方、TTは出現率が目立ったパターンがなく、バラエティに富んでいた。

(3)出現順序のパターンの前半部を見ると、すべての場面において、JJは{詫び}+{理由}…を最も多く使用しているのに対して、TTは親疎関係によってパターンの使い分ける傾向がある。具体的には、親しい相手に{否定的反応}+{理由}…を、親しくない相手に{詫び}+{理由}…を使用していることが分かった。また、親しい相手に対してはパターンの多様性が見られる。

(4)出現順序のパターンの後半部を見ると、すべての場面において、JJは …{理由}+{結論}または…{理由}+{結論}+{他の意味公式(例：消極的提案提示、行動指示、約束など)}を最も多く使用しているのに対して、TTは親疎関係によってパターンのバリエーションが見られる。親しい相手に多く使われるパターンは…{理由}+{積極的提案提示}、…{理由}+{条件提示}で、親しくない相手に多く使われるパターンは…{理由}+{詫び}、…{理由}+{結論}、…{理由}+{消極的提案提示}である。

3.冒頭の意味公式

JJとTTは{詫び}{理由}{否定的反応}の3つの意味公式を断りの冒頭の意味公式として多く使用するという共通点がある。

一方、相違点としては、すべての場面においてJJが{詫び}を使用する傾向が強いことが挙げられる。しかし、TTは親疎関係によって、意味公式を使い分けている。具体的には、親しい相手に{否定的反応}を、親しくない相手に{詫び}を使用する。また、JJに見られなかった{行動指示}{消極的代案提示}{冗談}{非難}の4つの意味公式は、同等からの依頼の場面にしか見られず、上下関係も意味公式の使用に関係していると考えられる。結果から、JJは冒頭の意味公式のバリエーションが少ないのに対して、TTは豊富であるという特徴があることが明らかになった。

4.最後の意味公式

相違点としては、JJは{結論}で発話を終了させる特徴があり、{条件提示}と{消極的代案提示}をほとんど使用しない。一方、TTは意味公式の使用にばらつきが見られ、場面によって各々の出現率は異なっている。

5.親疎関係・上下関係・依頼の負担度による分析

分析の結果、JJよりTTのほうが親疎関係によって意味公式の出現率に有意差が多く見られることが分かった。

また、上下関係による分析の結果では、JJとTTに以下2点の共通点が見られた。

- (1)目上より同等のほうが出現率に有意差が見られる意味公式が多く見られる。
- (2)JJとTTともに、目上と同等で使われる意味公式が異なっている。すなわち、いずれも上下関係が意味公式の使用に影響を与えていると言える。

最後に、依頼の負担度による分析の結果では、親しくない目上からの依頼の場面(場面2,4)と親しくない同等からの依頼の場面(場面6,8)において、依頼の負担度によって意味公式の出現率に有意差が見られなかった。全体的な傾向を見ると、JJとTTともに、依頼の負担度によって意味公式の出現率に有意差があまり見られなかったことが分かった。

6.言語形式ごとの分析

ここでは、3つの要因がJJとTTが使っている言語形式とその内容に関係しているのかを考察を行った。JJとTTの断りの特徴を表す10種類の意味公式、すなわち<直接的断り>の意味公式{結論}{行動指示}{理由}、<間接的断り>の意味公式{詫び}{積極的代案提示}{条件提示}、<付加表現>の意味公式{否定的反応[呼びかけ]}{冗談}{励まし}{非難}を本分析の対象とする。

7.日本語教育上の提案

外国人日本語学習者向けの日本語教科書を調査した結果、教科書において「手伝うことの依頼に対する断り」がほとんど扱われていないこと、扱われていたとしても会話の数がごく少ないこと、そして会話としての自然さが不足していることなどの諸問題があることが分かった。ここでは、本研究の結果を踏まえ、各レベルの学習者に「手伝うことの依頼に対する断り」を指導するための会話例と指導の順番を提案した。最後に、タイ人日本語学習者に会話指導を行う際に、注意点および指導のポイントを提案した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (POONVONGPRASERT THANIT)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 教授 筒井 佐代
	副 査 教授 今井 忍
	副 査 教授 宮本 マラシー
	副 査 教授 真嶋 潤子
	副 査 准教授 小森 万里

論文審査の結果の要旨

本論文は、人に何かを手伝ってもらふことの依頼に対する断りに焦点を当てた、日本語とタイ語の対照研究である。依頼を断る際には、相手との関係や依頼内容によって断り方を選ぶ必要があるが、日本語とタイ語での断り方の異同に関する対照研究は未だなされておらず、日本語教育における留意点についても明らかではない。本研究では、DCT（談話完成テスト）の手法を用いて、両言語の母語話者100名ずつへの調査とフォローアップインタビューを行って、日本語とタイ語の異同を明らかにし、その結果を日本語教育に応用する方法を提案することを目的としている。本研究はタイ語母語話者に対する日本語教育に貢献できる基礎研究として価値ある研究であると言える。

DCTにおける場面設定では、話者同士の親疎関係と上下関係、および依頼の負担度という3つの要因を組み合わせて、8つの場面を設定している。分析に際しては、各場面ごとの100名の回答を意味公式を用いて分析し、各意味公式の出現率、意味公式の出現順序パターン、断りの冒頭の意味公式、断りの最後の意味公式を両言語で場面ごとに対照し、そこから見られた傾向を上述の3つの要因から分析し、また意味公式の言語形式とその内容に関する分析を行った上で、それらの分析から見てきた両言語の差異について文化的な観点からの考察を行っている。分析結果から、両言語とも上下関係が意味公式の使用に影響を与えるという点、また依頼の負担度が意味公式の出現率にあまり影響しないという点で共通している一方、相違点としては、タイ語母語話者は親疎関係が意味公式の使用に影響を与えるが日本語ではあまり影響がないこと、日本語母語話者はすべての場面で{詫び}を使用しているがタイ語母語話者は親しい人にはあまり使用しないこと、断りの{理由}について日本語母語話者は理由の概要を述べるだけだがタイ語母語話者はその詳細を説明すること、タイ語母語話者は{条件提示}を使用してできるだけ依頼を承諾できるように交渉を行うことなどの特徴が指摘されている。そして、この研究結果を日本語教育に応用するには、言語知識を指導するだけでなく、依頼に対する考え方や人間関係に対する認識の相違などにも注意する必要があることが主張されている。

DCTによる研究において、これだけ多くの観点から網羅的に分析を行っている研究は少なく、得られたデータを最大限に活用して統計を用いた量的分析と質的分析を行い、両言語の異同とその傾向を見いだしている研究として類を見ないものである。このような包括的な研究を行ったがために、本論文は600ページに近い大部の論文となり、読み手に負担を強いるものとなったことは欠点であるとも言えるが、記述に無駄がなく、グラフや図表を効果的に用い、タイ語を知らない読者のために事例を丁寧に説明しているという点で、理解しやすく工夫された論文であると言えよう。

DCTによるデータであるため実際の言語使用とはずれがある可能性があること、また文化的な考察が表層的な議論に留まっていることなどの問題はあっても、大量のデータを様々な角度から緻密に分析し、両言語の特徴とその異同の一端を明らかにしたことにより、日本語教育学の分野における優れた博士論文として高く評価できる。以上のことから、論文審査委員一同は、本論文を博士号を授与するにふさわしい論文であると判断し、成績を合格とした。